

第 1 回 ハロハロ現地視察会 2014 GW

感想集

MANILA 4月29日-5月1日

CEBU 5月1日-6日



NPO 法人ハロハロ 第 1 回現地視察ツアー 参加者報告

E さん

初めてのフィリピン。
初めての海外ボランティア。

数カ国に旅に出たことがあります、
観光地ばかりの訪問でどこか違和感を持ちました。



もっと現地の方とお話したい、もっと異文化に触れたい、という気持ちと同時に日本という豊かな国に生まれたことへの感謝、この豊かさの中で生かされていて自分に何かできることはないだろうか・・・そんなことを思うようになりました。今自分にいったい何ができるだろうと考えた時にまずは行動してみよう、動かないと何も変わらない、そう考えました。そして偶然出会ったのがハロハロでのスタディツアーです。現地の方々と触れ合い、ホームステイさせていただき、お手伝いもさせていただける、まさに私の求めていたものでした。

一人参加ということで初めて出会う日本の方たちと異国で約 1 週間共にすることに多少の不安はありましたが、皆様同じ志を持った方々ということですぐに仲良くなることができました。

主な内容は現地視察・調査、食糧配給支援、子供たちとの文化交流、ホームステイです。

現地視察では、女性たちの自立支援として活動している団体の方々と話す機会を得ることができました。ゴミとなるジュースパックを利用して様々な雑貨を作っています。女性たちはやる気のある熱い方ばかりです。手先が器用でゴミになってしまいうものだったとは到底思えない素敵な製品ばかりです。また、現地のお宅に訪問し、生活についての調査も行わせていただきました。金銭面で問題を抱えており、生活費や学費に困っている方が多いという状況の中、大人数のこともがあり、母親は主婦業のみで収入がないという家庭が多いと感じました。



そのような主婦層に対して、隙間時間であっても雇用機会を提供し、女性の自立支援にアプローチしていくことの重要性が浮き彫りになりました。

子供たちとの交流やホームステイではフィリピンの方々の温かい心遣いや素敵な笑顔に 囲まれました。

コミュニケーションは英語、大人の方は現地の言葉でしか話せない方もみえます。英語を流暢に話せなくても心と心は通い合うことがで

きます。

ホームステイでは当たり前が当たり前ではないことにたくさんぶつかりました。お風呂はなく、井戸から水を汲んできて服を着たまま浴びます。トイレへも水を持っていき、水圧で流します。寝るときには天井から星空が覗いていました。日本では見られない数の星が空を覆っています。そんなシンプルな生活です。日本は物が溢れており、それが余計に複雑に絡み合っ人々を悩ませているのではないかと感じました。シンプルな生活には、物のありがたさや自然との共生の仕方を教えてもらいました。村の方々やホストファミリーはよそ者ではなく仲間のよう接してくださいました。別れの際にホストファミリーのお母さんが“貧しいけど私たちは幸せです。いつでもあなたの家に戻ってきてください。”と涙を流してくださいました。日本とかけ離れた気候や生活で辛いと感じたこともありますが、幸せな気持ちでいっぱいになりました。この家族を離れるのが辛くてしょうがありませんでした。



このスタディツアーへの参加での気づきや学びは、私の人生においてとても大きな財産であると感じています。日本でじっとしては何も変わりません。たくさん選択肢が持て、自分次第で選択できる自由な日本という国に生まれたことに感謝しながら、これからも国際支援に参加するという人生を選びたいと考えています。

NPO 法人ハロハロ 第 1 回現地視察ツアー 参加者報告

Ｔさん

実は今回のツアーで4回目のフィリピンでした。
最初のきっかけは2年前にルソン島北部で植樹ボランティアに参加したことでした。

それまで海外に行ったことのない僕にとって、フィリピンのイメージは何となく治安が悪くて怖いという印象だけを勝手に持っていました。

しかし、実際に行って学んだことは、どんな人でも国でも色々な魅力的な面や悪い面をもっている。それは新聞やテレビからの一方向からの情報で知るには不十分、自ら行って、見て感じるのが唯一の方法だということです。



少なくとも自分がみたフィリピンという国はそんな一面的な印象では語れない場所でした。

今回のツアーに参加したのも漠然とではありますが、自分とはまったく違うバックグラウンドを持った人々の価値観や生き方について自分の眼で耳で知りたかったからだと思います。

今回僕は、他のメンバーに遅れてセブで合流したため、現地の方より寧ろ、日本人同士のコミュニケーションに不安を感じていましたが、みなさんとても気さくに接して頂き、本当に安心しました。

現地の移動は専ら、ジブニーやトライシクル。フィリピンの乗り物には以前から、興味はあったのですが、一人だと中々不安で利用したことがなかったので今回はたっぷり楽しませていただきました。



現地で一番最初に感じたことは、“子供が元気”ってことです。

当たり前といえば、そうなのですが、最近あんなにパワフルに遊んでいる子供達を見たことがなかったので・・・何か感動してしまいました。

子供に限らず、あちらの人々の笑顔はほんとに眩しい。

日本に帰ってきて思ったことは、ああいう全力の笑みをみる機会が少ないということで、案外幸せを感じるコツはそういうところにあるのかもしれません。

今回個人的には、ジュースパックのリサイクル品の製造が現地とどのような結びつき方で行われているかも知れて勉強になりました。

単なる経済的支援ではなく、地元のお母さん方が時間の合間を縫って作りながら、家計の支えにする、自らの手で作り、その結果が確実に生活に反映されていくことを感じられることが重要なのでしょうか。

数日間、ホームステイ先のご家族と過ごしたり、現地の方にインタビューをしたり、配給の手伝いをしたりと非常に密な時間をすごさせていただきました。

特に印象に残っているのは、ホームステイ先の娘さんの働きっぷりです。学校が休みだというのに朝から忙しく仕事をこなし、ごろごろしているだけの居候の身としては思わず恥ずかしくなってしまうほどで・・・

歯がゆいのは、やはり言葉の問題です。ろくろく英語のできない自分のせいで、伝えたいこと、教えて欲しかったことの半分も伝えあうことができなかった。

言葉じゃなくて通じる部分もあると思いますが、言葉じゃないと伝わらないことの方が多いわけで、これを機に真面目に英語の勉強も始めます。



思い返せば、わずか数日でしたが、時間を忘れるほど印象深い経験ばかりで、現地の方々にはたくさんのことを学び、決意させて頂いたと思います。

僕もあの満面の笑みで、毎日の幸せを逃さないで過ごしていきたい。

そのためには今後も彼らから学び、そしてその恩に少しでも報いる方法を探していきたい。

今回このような貴重な機会を設けてくださった“HALOHALO”さんには深く感謝申し上げます。

NPO 法人ハロハロ 第 1 回現地視察ツアー 参加者報告

M さん

5 年前にセブに 3 カ月間滞在し、日本へ帰国したときに何だか異様で、少しこわいと感じた。ちょうど帰宅ラッシュの時間と重なっていたこともあってか、皆が無表情できれいな列をつくり地下鉄に乗り込んでいた。その光景が、まるで工場のラインでロボットがつくられ流れているようだった。そんな風を感じさせるくらいのフィリピンの人たちの人間らしさ、あたたかさ。久々のフィリピンは、特にセブは、コンビニやファーストフード店も増え、街並みはガラリと変化していた。しかしながら、そこに暮らす人たちは、明るい笑顔とホスピタリティ溢れる優しさで、以前と変わらぬ様子で迎えてくれた。

今回の訪問では、NPO ハロハロが取り扱う「Ang Kyut」(<http://angkyut.com/>) のアップサイクル雑貨の生産者グループであるマニラのパヤタスとセブのタリサイのコミュニティに滞在させていただいた。生活の向上や、子どもたちの教育の機会を得るために、地域のお父さん、お母さんたちがジュースパックやお菓子の袋などを再利用して雑貨をつくっている。ツアー中は、地域の学校や家庭にホームステイをして、住民の方々へのインタビューや子どもたちとの交流、食糧配給のお手伝いなどをさせていただいた。



▲ 食糧配給の様子

パヤタスもタリサイも、地域の人たちが中心となり、フリースクールや教会で、主に就学前の児童を対象として読み書きの練習などをしており、教育への意識の高さがうかがえた。フィリピンも義務教育の間の学費は無料ではあるが、制服や交通費などの経費が負担になっていたり、親の仕事を手伝わなければならなかったりという理由で学校に行けない子どもたちがいるということは以前から知っていたが、今回、政府に届け出ていない（戸籍がない）ために教育を受けられない子どもたちもいるということを初めて知った。登録料を払えない家庭のために、地域のホールで無料の登録会が行われることもあるが、親が文字を書けないために子どもの登録をしていないということもあるということだった。問題の背景、貧困の世代間の連鎖について、あらためて考えさせられた。

最終日に、5年前にお世話になった現地フェアトレード NGO の友人たちに会うことができた。当時、わたしはマンゴー農家の人々の調査をしていたのだが、いつも山奥の農家まで案内してくれていた子も、夜遅くに仕事を終えて疲れている中、わたしの突然の来訪にも関わらず遠くから駆け付けてくれた。ひとしきり思い出話に花を咲かせた後、彼も決して生活に余裕はないはずなのに、最後に再訪の記念にプレゼントをあれこれ渡そうとしてくれた。今回のホームステイのホストファミリーもそうだったが、フィリピンの人たちは優しさと真心と、決して裕福ではないのに自分たちが持っている物は全て差し出そうとするのではないかという勢いでもてなしてくれる。これだから、わたしはフィリピンに惹きつけられ、忘れることができないのだ。



▲ 見慣れない人に興味津々？人なつこい子どもたち



▲ 日本に連れて帰りたいくらい！かわいすぎる！



▲ パヤタスの生産者のお母さんたち



▲ ホームステイ先のカミルちゃん。恋バナもしました♥

最後に、フィリピンの人たちのために何か恩返しをしたいという想いで模索していた私を、ボランティアとして受け入れてくれている代表の悠さんに感謝します。そして、今回の同行者の皆さま、貴重な経験を共有させていただきありがとうございました。

NPO 法人ハロハロ 第1回現地視察ツアー 参加者報告

Yさん

今回のツアーは、自分にとって2度目のフィリピン旅行となりました。前回にフィリピンにいったときもそうでしたが、自分の場合、英語が他の参加者よりもできないおかげで、ツアーの同行者にはご迷惑をかけっぱなしで、現地の方々とコミュニケーションがとれたとはいいがたく、帰りには現地の方から「つぎにくるときはもっと英語しゃべって」といわれてしまう始末でしたが、前回よりもフィリピンという国そのものに少しなれたこともあって、若干ですが余裕をもって旅行することができました。



ゴールデンウィークの時期だったため、飛行機の旅券をとるのに苦労し、当初の予定より出発日と帰国日をそれぞれ1日ずらさざるを得なくなり、当初5日間を予定していたのが、まるまる1週間も滞在することになりました。

前回、フィリピンにいったときは、事前の予備知識が不足していたうえに英語ができず、ツアーに同行してくださったKさんにたよりっぱなしで、治安が日本より悪いとのことで、とにかくスリや置き引きには常に気をつけなくてはならず、そのことに神経をつかっていたために、なかなか余裕をもって現地を見て回れなかったのですが、今回は余裕ができて、前回よりフィリピンの国の楽しい部分を見て回ることができたかなと思います。

今回は、滞在期間が予定よりのびたこともあって、市街地のショッピングモールをじっくり回ることができたのですが、そこで日本のキャラクター（ドラえもん、ロボットもののアニメ、ポケモン、戦隊もの、鉄腕アトムなど）の商品が多くみられ驚きました。

また、後述するステイ先の家庭のテレビで、人魚姫を題材にした現地制作と思われるテレビドラマ（CGや特殊メイクがふんだんにつかわれており、なかなか手の込んだ内容）がみられたり、地元の人がヒップホップのダンスを踊りながら農作業をする（！）動画（自分たちで撮影、編集したものらしいです）を見せてもらったりと、現地のエンターテインメントのことがわかって興味深かったです。

さらには、自分が幼稚園ぐらいのときにやっていた日本のテレビアニメの『ボルテスV』がフィリピンでは大ヒットしたということがあり、後述のパヤタスの学校でその主題歌が学校の授業なかで流れたのも驚きました。

今回のツアーのメインは、セブの村の家でのホームステイでしたが、その前に前回フィリピンにいったときにもお世話になった、パヤタスの学校で一泊しました。前回でもお世話になったレティ校長とお会いできて良かったです。治安の悪い場所のため7時が門限で、それ以降は慣れない人以外は出入り禁止となってしまう。前回は、2人で泊まったため、すぐに寝るという感じでしたが、今回は人数が多かったので、食事のあとに色々と話せたのが良かったです。

その後、セブの村の家で3泊させていただきました。自分たちが泊まった家は、エイミーさんという教会でシスターになるために勉強している学生の家で、家族の雰囲気がとてもよく、またコンクリートでできた家のために、夜になると比較的すずしくて問題なく生活できました。セブの村の多くは、竹のような木で編んだ壁の建物が多く、そのなかで自分たちの泊まったエイミーさんの家は、現地でも比較的に経済的に余裕のある家のようにでした。エイミーさんの一家は非常に親切で、自分たちが少しニッパハウスの話題をすると、すぐにニッパハウスの家に案内してみせたり、お父さんが船乗りということで、船に載せてもらったり、シニガンの話題をしたら、すぐに朝食にシニガンを出してくださったり、とこちらが恐縮してしまうほどでした。

ニッパハウスの家に案内してくれたとき、去年の台風で被害にあった場所も見せていただきました。今は家は元通りになっていますが、当時は家ごと流されて大変だったそうです。しかし、セブのこの村の方々は死傷者はなく、家は流されましたが、もともと家に高価なものがなかったために損失もほとんどなかったそうです。持たざるものは強い、ということでしょうか（とはいえ、食料などは不足し、そのためにハロハロも募金して資金を援助していました）。



また、偶然にも、ステイ中にエイミーさんの誕生日があり、そこでハロハロのツアーのメンバーも全員あつまって誕生日パーティーで盛り上がりました。フィリピンのひとたちにとってはスパゲッティは高価でごちそうになるのだそうで、スパゲティがパーティーででたのですが、ビュッフェスタイルの食事、現地の方々と一緒に食べるため、そういう現地の人にとって高価なものはなるべく食べず、現地の人にゆずるようにしました。

現地の方々は、話によると自分らのようなお客様をもてなすために、貧しいのに無理して普段自分たちが食べれないような高価なものをごちそうしてくれるという傾

向があるのだそうです。セブで出していただいた食事はいつも豪華なものでした。ただ、いつもビュッフェスタイルの食事であり、残った物は現地の方々にシェアして食べているので、自分としては現地の人たちに食べていただこうと、あえてあまり沢山たべないようにしていました。

セブの生産者グループのリーダーで、前回のツアーでもお世話になったグレマーさんは、教会の牧師さんで、大変真面目でやさしい方で、こういった方が生産者グループのリーダーというのは大変頼もしいとおもいました。今回はツアーの途中に日曜日があったため、礼拝も見学させていただいたのですが、教会はギターやドラム（正確にはドラムとして使える箱）があるという、大変フランクな雰囲気教会で、グレマーさんも普段着で演説をしていました。普段は大人しいグレマーさんですが、このときは大変エネルギッシュな語り口で、パワーに圧倒されました。自分は英語ができないので、代表の成瀬さんに大まかな意味を教えていただいたのですが、日本のような先進国は物が豊富だが幸せな人でない人もおおく、セブの人たちは物がなくてもハッピーな人が多いということを話していたそうで、この部分は物が豊でありながら自ら命を断つことが多い日本の現状を考えると納得できるものでした。物質的な豊かさのみを追求して、先進国の人たちは、なにか大事なものを忘れているのかもしれませんが。



セブのホームステイの最後の日、お別れの挨拶をしたときに、ステイ先の家庭から「またいつ遊びにきてもよい」という証の、貝でできたネックレスをいただきました。このネックレスは一生の思い出として大事にしようとおもいます。歴史的にも文化的にもフィリピンは東南アジアのなかで特殊であり、それゆえの色々な問題を抱えているといわれ、その1つとして経済格差がありますが、グレマーさんとそのお弟子さんのような方々の活躍で、一刻も早く心も物も豊かな国になることを祈って、フィリピンを後にしました。